

れただけであったが、9ヵ月後にMRIで松果体部に腫瘍が疑われ11ヵ月後には増大したためGH治療を中止し手術を行って胚腫と確定した。また2歳以降低Na血症を来すことがあり、術前の精査で副腎不全の合併が判明した。MRIでは視床下部に腫瘍性病変を認めなかったが、下垂体柄が離断しており多ホルモン欠損は分娩外傷によるものと思われた。胚腫は偶発性と考えられるが、GH治療で急速増大した可能性は否定し得ない。

7 原因不明の低血糖症の1例

森川 洋・小菅恵一郎*・佐々木英夫
新潟こばり病院糖尿病センター
新潟大学医歯学総合病院第一内科*

症例は74歳男性。

【主訴】意識障害・低血糖。

【既往歴】慢性心不全、心房細動、僧帽弁閉鎖不全、脳血管性痴呆、胃癌(胃垂全摘)。

【現病歴】1600kcal/日を6分食中、2004年1月25日顔面蒼白・冷汗著明・意識混濁あり、血糖測定にてLo。1月27日ふらつき・軽度冷汗を認め、血糖測定にて20mg/dl。同日、精査のため当科紹介入院。

【経過】入院後も朝食前、または検査のための絶食後に低血糖を繰り返した。入院後の検査では、インスリノーマ・ダンピング症候群・下垂体機能不全・副腎不全・IGF-II産生腫瘍等は否定的であった。低血糖の原因は不明だが、高アディポネクチン血症を認めた。我々は原因不明の低血糖の1例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

8 併用薬により血糖値の上昇を認めた2型糖尿病の3例 — 薬剤の意外な影響について —

中村 宏志

中村医院内科

〔症例1〕60歳女性。高脂血症の治療のためアトルバスタチン10mgを投与したところ、4ヶ月後にHbA1cが5.7%→7.5%と上昇した。アトルバ

スタチンを中止し、ベザフィブラート400mgに変更したところ、4ヶ月後にHbA1cは6.0%まで低下した。

〔症例2〕67歳女性。52歳頃発症の2型糖尿病で、HbA1cは6.1-6.4%とまずまずのコントロールで合併症なし。平成15年5月受診時に5日前から耳鼻咽喉科にて耳鳴の治療を受けているとのことであったが、食後血糖が275mg/dl(それまでは180mg/dl程度)と高値で、耳鼻科主治医に確認したところ、突発性難聴でプレドニゾン内服治療を受けていた。食後血糖上昇は、ボグリボース内服で抑制でき、1ヶ月後のHbA1cは6.5%であった。

〔症例3〕79歳男性。67歳時発症の2型糖尿病で、HbA1cは6.1-6.4%とコントロールは良好。1年前から泌尿器科で前立腺肥大症の治療を受けていた。酢酸クロルマジノン内服により、HbA1cは8.8%まで上昇したが、中止後2ヶ月で6.0%まで改善した。

【結語】アトルバスタチンにより、糖尿病患者の血糖コントロールが悪化する症例があり、注意が必要である。高齢化社会を迎え、糖尿病患者の合併症の増加に伴い、他科の併用薬にも注意を払うことが必要である。

9 人間ドックOGTTの経過

山谷 恵一・高澤 希子・伊藤 剛栄*
山本 朋彦・新沢 秀範・須田 陽子
尾崎 信紘**

新潟通信病院内科
同 臨床検査室*
同 健康管理科**

1997年以降に当院人間ドックでOGTTを2回以上おこなった571例(男522人、女49人、初回時年齢37~67(平均50.8)歳)について検討した。

①初回の結果は正常型66.5%、境界型29.6%、糖尿病型3.9%であった。

②1~6(平均2.7)年後、境界型から16.6%、正常型から1.1%が糖尿病型となり、糖尿病型の

発症率は 21.6/千人/年となった。

③境界型のうち IFG と IFG/IGT は、IGT と 1HPG のみに比べ、糖尿病型となりやすかった ($p < 0.01$)。

④しかし糖尿病型になった例では、初回の HbA1C が高値であった ($p < 0.01$)。

⑤糖尿病発症の側面で境界型をとらえると、日本糖尿病学会基準は 571 例に OGTT をやり、169 例の境界型に注目するが、正常型から糖尿病型となる 4 例を見逃す。

⑥アメリカ糖尿病学会の新基準では空腹時血糖のみで、181 例に注目し、見逃し例は IGT からと正常型からの計 4 例となる。

10 小児における高感度 CRP と肥満、血圧、血清脂質との関連 (第二報)

樋浦 誠・菊池 透・長崎 啓祐
田中 幸恵・小川 洋平・内山 聖
新潟大学大学院医歯学総合研究科
小児科学分野

小児での高感度 CRP と肥満度、血圧、血清脂質との関連を検討した。肥満小児は非肥満小児に比べ有意に高感度 CRP が高く、血圧上昇や代謝異常の進展を認めた。また、高感度 CRP 高値群は低値群に比べ肥満度、血圧、LDL-C/HDL-C 値が有意に高かった。単回帰分析では高感度 CRP と肥満度、血圧、LDL-C、アポ蛋白 B は正の相関があり、HDL-C とは負の相関があった。ステップワイズ重回帰分析では肥満度のみ高感度 CRP と関連していた。また、肥満男児の縦断解析では肥満度改善群は悪化群に比べ有意に高感度 CRP が改善し、高感度 CRP 改善群は悪化群に比べ有意に腹囲、肥満度、体脂肪率、肝機能が改善していた。

小児において高感度 CRP は肥満や慢性炎症を反映する有用な指標であり、将来の代謝異常症につながる小児肥満の質の評価に高感度 CRP 測定は有用と考えられた。

11 小児肥満における肥満度、体脂肪率、腹囲、腹壁脂肪厚の変化に伴う代謝異常の変化の検討

菊池 透・長崎 啓祐・樋浦 誠
田中 幸恵・小川 洋平・内山 聖
新潟大学大学院医歯学総合研究科
小児科学分野

小児肥満による代謝異常の変化と関連が強い体格指標を明らかにするために、6～15歳の単純性肥満男子 63 名を対象に、1年間の肥満度、体脂肪率、腹囲および腹部エコーでの最大腹膜前脂肪厚 (Pmax) の変化とアディポネクチン、インスリン、ALT、LDL-C、HDL-C、TG、収縮期血圧、高感度 CRP の変化を単回帰分析で解析した。肥満度の変化は ALT、LDL-C の変化と、体脂肪率の変化は GPT、LDL-C、高感度 CRP の変化と、腹囲の変化はアディポネクチン、GPT、LDL-C の変化と、Pmax の変化は LDL-C と関連があった。インスリンの変化と関連がある指標はなかった。メタボリックシンドロームの上流に位置するアディポネクチン、インスリンの変化と関連がみられたのは、アディポネクチンの変化と腹囲の変化だけであった。しかし、インスリンの変化との関連した指標はなかった。また内臓脂肪蓄積の指標である Pmax の変化は代謝異常の変化との関連が少なかった。小児肥満症の治療上の指標としては腹囲の変化が有用であると考えられた。

II. 特別講演

「臓器特異的内分泌因子とメタボリックシンドローム」

大阪大学大学院医学系研究科
分子制御内科学 教授

下村 伊一郎